

性の倫理、禪スキャンダル、カルト

くざん ピーター シアソン

2011年 2月 14日

タンテイ ルワニ の第一面写真より

“スキャンダル”の語源は、ギリシャ語のスキャンダロンに起源し、罣又は倫理の躓きの原因と言う意味でしたが、時を経て“スキャン”は、罣を跳ね返すバネの心棒の名称となりました。そして現在では、その意味も変わって、躓きの原因を指していたものが、躓きそのものになりました。すべての人間社会、組織では、倫理の躓きに落ち入る傾向があり、もし仮に私達の路は是等の上にあると思いたいのであるならば、禪仏教界でさえこの例外ではない事を思い出すがよいでしょう。

最近のスキャンダル二件、－さらにもう二つの、というべきなのですが－禪社会の注目を引きました。二件とも、男性教師が彼らの女弟子と性交渉を持った事件です。このスキャンダルの内、一件は、ニューヨーク禪スタディ ソサイエティの創始者、島野栄道師が関係しております。島野氏は、初めてアメリカへやってきた日本人の禅教師の一人で、やがて、活動的な禅教団を築きました。

公報によれば、島野氏は何十年にも渡る、連続的セックス食肉動物で、強引、強要的に女弟子にセックスを迫り、そのうち幾多の女性は性交渉を持つに至り、その結果、彼女等は大きな精神的屈辱を体験しています。既に長期に渡り、彼の性癖に関する報告は表面化しており、彼の責任を追求する声は高まっています。しかし、彼を支持する彼の僧伽のメンバー達は、彼の犯罪を真っ向から見過ごし、事態を誤摩化しています。あるケースにおいては、彼の霊的深淵さがあまりに偉大であると言い、そのような“絶対的存在者”には陵辱という言葉は該当しないというのです。

最近、島野氏の行状の証拠文書が、(www.shimanoarchive.com)として広く一般公開され、ニューヨークタイムスでは、彼の僧伽内での問題が、記事になりました。

(http://www.nytimes.com/2010/08/21/us/21beliefs.html?_r=1&scp=1&sq=eido%20shimano&st=cse)

一種の公式謝罪の後、島野氏は告訴に対抗し、個人でニューヨークタイムス宛手紙を送りました。この手紙は、後に公表されましたが、後悔の兆候は皆無で、手紙の内容から理解出来る限り、彼自身の創立した僧伽内で彼は教職に携わる事を制限されているようです。島野氏に対して、怒りを覚えずにいることは困難なことです。同時に、彼もセックス常用癖を持って生まれ、これに束縛されて生きなければならぬ受難者の一人であるという事を理解しなければなりません。彼の僧伽と、被害者にとって和解、回復への路は、遠く厳しいものでありましょう。

ごく最近の事件では、デニス げんぼう マーゼル、サルトレーク市、ビッグマインド ビッグハート禅堂の指導者がその地位を辞職したことです。彼は弟子と性交渉を持った事を自白しました。ミスター マーゼルの謝罪は、真意のあるものに見えるのですが、もちろん、彼の懺悔の約束が今後いかに遂行されて行くかという事に関わってきます。彼は禅師の象徴である袈裟を脱ぐということですが、彼の特殊な“大なる心”で布教を続けると言うのです。これが彼の呵責とどのように関わっているのか分かりません。これも、やがて分かる時が来るでしょう。彼の所論は以下でご覧になれます。

<http://www.bigmind.org/Home.html>.

この二つの事件を取り上げる要点は何でしょうか？ 禅僧として人々に修行を勧める者にとって、この事件の有り様は、失望の象徴であり、悲嘆の極みです。しかしこの事件を注意深く観察することは、意味のある事だと思います。現実を見つめる事は、たとえそれが辛いことであっても、修行に役立ち、特に、このような事件は、私達が如何にして健全な僧伽を築いて行くかと言う点を考慮する上で参考になります。

この種の限界を犯した不行跡を起こさせ、私達の環境、社会での存続をほしいままに許し、人々は善意を持ってこれに参加している事をどのように解釈するのでしょうか？ 私はこれを個人的経験の光明と見ます。 私がまだ若い頃、- 私の20代早期 - 私は2~3年、霊的カルトの中で暮らした事があります。当時私はこれがカルトである事に気付かなかったのですが、後になってカルトである事が分かりました。 当時の師を思い返し、グループの活力ある生活を思い返す時、私は僧伽の内部に、島野やげんぼうのような事件を起こさせる原因が容易に見つかると思うのです。

精神修行において私達は最高の希望と弱さを、困惑と共に経験します。 いかにも長期に渡って、いかにも深遠な修行を積んだ師でさえもこの例外ではない事を、私達は忘れがちです。 これは困難なことで、多くの師達は自分自身について、この事を忘れ、特に彼らの弟子の追従の的として理想化されている場合は、更に難しくなります。 僧伽で師に対して異議を申し立て、師の権威を問う場合、遠慮深いものになります。 なぜならば、皆の希望や傷つきやすさというものは、不安なものに対する救い、不確かなものに対する防御として、師の分別に関わる事で、丁度、高価な賭け金のゲームのようなものといえます。 そのため、一部の僧伽では意識的又は、無意識的に、師に対する非現実的な観念が育ち、閉鎖的で緊密な組織を築いて行きます。 ある例では、権力が確かなものとして正当化され、修行は儀式化され、師の地位は聖なるものとして、犯すべからざるものであると言う観念を育てて行きます。 私はこのような動きは、住み込み形式の僧伽において、更に顕著なものになると思います。

私は早期、居住式道場において、霊的教師のもとで、これらの経験をいたしました。 この師は従来の禅とは無関係でしたが、すばらしい才気縦横の男で、団体や我々個人に多くの深遠な言葉を与えました。 彼は人々に、彼を一種特別な存在として崇めるよう勧め、彼の教えに対するいかなる質問や挑戦も、弟子の理解力、誠実性、又は人格の欠陥の現れとして解釈されるのでした。 表面では、師は弟子達に質問を許すのですが、質問の趣旨と異なった返答、又は明らかに間違っている事に気付いた場合、弟子に向かって、師の教えに対する弟子の反論の自由を教える為に、わざとそのような言った迄であると言うのです。

なぜならば、このような団体は、精神的にも距離的にも隔離された住居であり、メンバーは、人間関係、自己の存在目的等全面的に、師や同僚を頼って暮らさねばなりません。 師にたいする固執した異論や挑戦は追放を意味します。 実質的に貴方は“追放されたもの”と見なされ、師の地位を補強するため巧妙な手段が施されます。 これは、“自分に従うか、でなければ、さっさと出て行け”という例で、時を経て、教団は、師を中心に自己保存の温室を強化して行きます。 他の言葉でこれをカルト、偶像崇拜と言います。

ここにカルトの性格を示す数々のリストがあります。 すべてのケースに該当はしませんが、少なくとも、僧伽の健全性の状態を分析する上で有効な資料になります。 私の経験では、カルトは一夜にしてカルトにはなりません。 それらは、少しずつその方向へ進展して行くのです。 カルト的兆候とこれの傾向に敏感である事は、カルトが活動を始め、害悪が生じる前に、これをくい止める防御策になります。 禅僧伽で共に修行する場合、以下に示したいくつかの、インターナショナル カルティック アソシエーション ウェブサイトよりの抜萃が、要点の一部として適用出来ると思います。

http://www.csj.org/infoserv_cult101/checklis.htm

- * グループが、彼/彼女自身の信条、イデオロギー、又は真理、禅用語で言えば、真の達磨、正法に関係なく、指導者/師に対し熱狂的な、疑いの全くない委任が現れます。 このような僧伽では、長なる師の言葉、見解が唯一無二の教えとなつて尊重されます。
- * 質問、疑問、異論は、望ましくない事とされ、時には罰さえ受けることとなります。 望ましくない事とは油断がならないもので、罰は僧伽内での孤立、不認可という形をとります。
- * 指導者は、時には、細部にわたって指図し、メンバーは、どのように考え、行動し、感ずるべきかという事もこれに含まれます。 ;例えば、メンバーが人と会う場合や、職を変える場合、許可が必要です。 これは、我々にとって従来の修行の上で、異例のように思えますが、実はそうではなく、

現にある禅師は、弟子が正式に弟子として入門する時、弟子の私生活の細部にわたって干渉し、昔の友人と面会するにも、何時、何処で、誰と、どのようにという点まで明らかにする事を強要されます。

- * 指導者はいかなる権威に対しても、責任はありません。多くの僧伽では理事会なるものがあり、師は、基本的には、理事会に対して責任があるのですが、時を経るに従って実際の責任は消え去り、特に理事会のメンバーが師の弟子によって成立されている場合は、このような結果を招きます。
- * 指導者や、グループに好ましい状態で仕えるためには、友達や家族との関係を絶たなければなりません。そして、グループに参加する時点で抱いていた個人的目的や活動を大きく変更しなければならなくなるでしょう。更に前項で述べた事以外、“仕える”という言葉は禅門では、あまり、用いませんが、私達は家を出た趣意の重要性を師に仕えるという精神修行に置き替え、師の強要する細密操縦と合わせて、やがて一種の奉仕という形態を築いて行くのです。

私がここでこれを提議する理由は、全ての精神的教団において、全ての禅僧伽において、カルトの危険性があるという事を考慮に入れておく事は有益だと思ふからです。 人間はこの方向へ赴く強い性向を持っています。社会やグループは教職階級制を築き、指導者は、特性と権力を即座に送られますが、この深い生態社会学の根の発生を避ける事は困難です。そしてこの動きは、もし指導者が、彼/彼女自身 - たとえ善意の目的であっても、野心家である場合 - 常に追従と権力が伴います。イラクで、サダム フセインの像を引き倒した時、誰かが、“台座だけは残した方が良く、将来又誰かが使うだろう”と言いました。

禅の伝統において、私達は力のある禅師達の真価を認めており、力のある禅師が必ずしも禅堂をカルト的に変えて行く危険性があると言っている訳ではありません。しかし、嫌な表現ですが、僧伽が、カルト的兆候、又は師の態度に関心を持つ事は大切な事で、遅過ぎぬうちに、むしろ出来るだけ早く、話し合うべきだと思います。これは僧伽全体の健全性と個々メンバーの安全に関わる事なのです。